

「一艇ありて、一人なし」

旧職員 山本哲嗣

ボート選手の間では、その団体精神の重要性を説く言葉として古来この言葉が好まれている。そして、チーム・ボートを経験したものは誰しもそれぞれなりの深さで、この言葉の意味を実感し、理解する。

学生時代からオールを握り、自分なりにこの言葉の意味を咀嚼していたつもりであったが、本当にこの言葉の重さを理解できたように思えたのは、昭和六十三年真夏の琵琶湖における、山城高校女子クルーのインターハイ優勝レースを見たときであった。

当時の記憶を辿ってみると、まず、クルー結成時の不安な思いが甦る。地元京都国体の年とはいえ、前年全国四位の主力は卒業し、二番を漕いだ慶田（現山城高教員）も、シングル・スカルに転向して、前年の経験者は主将の住山一人となっていた。あとは舵手の彦素をはじめ漕手の平井、山田、西村とも二

年生がメンバーとなった。体格・体力とも社会人に引けをとらず、全員が三分台で一キロを駆け抜けた前年のクルーと比較すると、すべての面で脆弱さが目立ち、練習を眺めながら岸で溜息を吐いたことも再三であった。実際にシーズンが始まっても艇速は伸びず、インターハイの出場すら危ぶまれた。六月の近畿大会でも優勝はしたものの、前年の圧倒的な大差での優勝と比較すると、やはり物足りない思いが強かった。そして、同月の中日本レガッタでは全国常勝の富山・八尾高校に五〇メートルの大差をつけられてしまった。前年のインターハイ決勝では三〇センチの艇差を争い惜敗していた相手だけに、一年間での彼我の差にあらためて愕然とした。一〇秒の差を逆転できるとは、到底思えなかった。

その到底思えなかったことが、五十日後に現実のこととなつたわけであるが、その過程はどれも印象深く、限られた紙幅では尽くしがたい。よって、主なものを簡条に挙げて懐かしく振り返ることとしたい。

一、琵琶湖への往復の時間を惜しんで期末試験中に琵琶湖で合宿し、そこから学校に通ったこと。夜には、互いに教え合え、かえって成績は上がったようであった。

二、琵琶湖への往復の車中二時間を、ミーティングに充てたこと。男子部員たちはそのあおりを食らって電車で通わざるを

得なくなつた。

三、シングルの慶田選手と刺激しあえたこと。新聞等に取り上げられることの多かつた彼女に対して、クルーは強いライバル意識を持っていたようであつた。慶田選手は直前のシングル決勝で〇・六秒差に泣き、結局インターハイ準優勝であつた。

四、レース前に豪雨がつづき、順流でのレースとなつたこと。ハイ・スピードのレースでは、平均で一〇センチ以上あつた身長ハンデも薄まり、むしろ技術が重要な要素となつた。

五、準決勝レースでは力を温存し、三時間後の決勝レースでスタートからのロングスパートを決行したこと。かねて用意の玉砕戦法であつた。レース一週間前には対乳酸トレーニングとして実施していたが、軽量クルーにはスピードに乗り易いという利点もあり、また、他校は思わぬレース展開にパニックになつたとのことであつた。

あれから十五年あまり、何回かは確信を持つて、決勝レースに臨むクルーを桟橋から送り出したが、実力通りにレースを終えたことは一度もない。「優勝」の難しさはよく言われるところであるが、その都度それを痛感する。それだけに様々な微妙な要素が輻輳し、かつメンバー全員の意志がその一瞬に一致し、力が増幅する希有な場面に立ち会えたことは、文字通り貴重な、そして大切な思い出となっている。